

Title	地域言語の社会言語学的研究
Author(s)	真田, 信治
Citation	大阪大学, 1990, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/37555">https://hdl.handle.net/11094/37555</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 【 2 】

氏名・(本籍)	さ 真	だ 田	しん 信	じ 治
学位の種類	文	学	博	士
学位記番号	第	9 2 8 8	号	
学位授与の日付	平成 2 年 7 月 17 日			
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当			
学位論文題目	地域言語の社会言語学的研究			
論文審査委員	(主査) 教授	徳川 宗賢		
	(副査) 教授	佐治 圭三	教授	前田 富祺

## 論文内容の要旨

本論文は、社会言語学の視座から、日本の地域言語（方言）の実態と動向を追究し、言語変化のパターンとメカニズムを著者の創造的な新しい手法によって詳しく考察したものである。この分野での初めての総合的かつ本格的な研究である。

第 1 章（「社会言語学と日本の方言研究」）では、まず、新しい社会言語学の方法の枠組みを提示する（第 1 節）。そして、日本の方言研究界の歴史を綿密に跡付けした上で、社会言語学的研究が、現今の方言研究界でもっとも活気に富み、将来への展望のひらけた分野であることを示し、その発達をめぐって、外的なインパクトによって盛んになった経緯はあるとしても、自らの課題について、自らの方法で解こうとする努力が続けられてきた結果、この領域での研究が、最近、海外からも熱いまなざしを注がれるようになってきている状況について述べる（第 2 節）。

第 2 章（「地域社会の言語行動」）では、北陸の一地域社会（越中五箇山郷）をモデルケースとして十年間隔で行っているリーグ戦（話し手・話し相手組み合わせ総当たり）式全数調査でのデータに基づいて、社会構造の変化と言語行動の変化の相関を詳しく検討している。その内容について瞥見すると、まず、この地での敬語行動は、20代を境に大きく分かれるが、20代以上の大人の世界では、伝統的な各家の格、家族内での地位によって待遇表現形式の使い分けが規定されること、そして、これは、家族同士、親戚同士の枠を越えて地域社会（集落）内の全成員を規制することを指摘する（第 1 節・第 2 節）。しかし、その後、伝統的な家格による規制が、いわゆる都市化とともに急激にゆるんできたこと、また、敬語行動においては

個人主義化への傾向が認められるが、それは地域社会における生活共同体意識の微弱化とかかわるものであること、そして、地域共通語としての新形式の浸透が著しいこと、などを具体的に明らかにする(第3節・第4節)。さらには、言語行動の“規範”の動態を跡付けし(第5節・第6節)、新形式受容のプロセスにおいて、その形式の運用の仕方が地域社会の成員それぞれの社会的属性とどのように関係しているかについて、詳細に検討している(第7節)。なお、第8節では、地域社会におけることばの場面による“きりかえ”の具体例を報告し、あわせて、日本語の待遇表現に関する各種要素の機能的な現れ方の一般的な傾向について考察している。

第3章(「地域社会の語彙の社会的諸相」)では、戦後の語彙研究の流れを概観し(第1節)、その上に立って、方言語彙の相互対照・比較のためには、意味上の側面、音形上の側面、文体上の側面の3つの視点が特に重要であることを指摘し(第2節)、地域言語における語彙体系の記述例(「気象」語彙の場合、「親族」語彙の場合、「職業」語彙の場合)を示すとともに、語彙の部分体系の対照研究のモデルを呈示する(第3節)。そして、さらには、地域社会における語彙の機能的運用をめぐるの社会的諸相を多様な角度から分析している(第4節)。

第4章(「地域社会の言語変化」)では、地域社会での言語変化をめぐる、地域差・年齢差などを軸として、語彙、語法、語音、そしてアクセントに関する、各地でのさまざまな事象を取り上げて、その動態のパターンを綿密に分析するとともに、変化のメカニズムを総合的に考察している。第1節では、越中五箇山郷における連体格としての「の」と「が」両助詞の待遇表現上の区別の動態が扱われ、第2節では、2拍名詞第2・3類に属する語のアクセントの動態が扱われる。そして、第3節では、動詞のいわゆるサ行五段活用の形とサ行変格活用の形との共存をめぐるの各地での状況が扱われる。なお、第4節では、伝統的方言の退縮と新しい方言の発生に関する事例が扱われる。特に、ここでのグロットグラム(地理×年齢層図)に基づいた新しい方言の発生をめぐるの考察は、この種の調査研究の先駆の一つとして数えられるものである。古い方言がなくなって新しい方言と交替することは、実は昔から繰り返されてきた一般的な事象である。しかし、伝統的な方言が全体として崩壊しつつあるように見える現代において、このような新しい方言の誕生という点に焦点を当てる研究は、地域言語の将来の展開を予測するものとして、また、今後の言語計画への基礎的データを提供するという面からも重要な意義をもつものと考えられる。

第5章(「地域社会の言語接触」)では、地域社会における方言と方言との接触、また方言と標準語との衝突の状況と、そこに介在する人々の言語意識に関するそれぞれのフィールドからのデータをまとめている。対象フィールドは、首都圏、中京圏、関西圏、そして奄美大島にわたる。首都圏では、東京語の拡大の様相を明らかにしている(第1節)。中京圏では、現時点で、東西方言の境界線は、この地においてどのように推移しているのか、という点を言語意識ともかかわらせて探っている(第2節)。また、第3節では、奄美大島で行った言語地理学的調査のデータから、この地の音韻面における“移行性分布”の様相について考察している。なお、“移行性分布”とは、言語が接触しつつ変化する過程の地理的投影であ

って、一方が一方を浸触した結果の現時点での姿である。そして、第4節では、標準語の干渉によって生ずる新しい方言体系を neo-dialect と称すべきことを提唱し、特に関西圏の場合を事例としてさまざまに検討を加えている。

第6章（「言語習得と地域社会」）では、言語習得にかかわる使用語彙と理解語彙の問題点を検討し（第1節）、一個人の理解語彙の量的な発達の様相を、品詞論的範疇、および意味的範疇ごとに具体的に考察している（第2節）。また、個人の言語使用の変化を地域社会の言語の変遷とからめて動的に記述している（第3節）。

第7章（「地域言語研究の展望」）では、社会言語学的研究の歴史を跡付けし（第1節）、今後の地域言語研究の課題と方法を具体的に論じている。高度情報化社会と言われる中で、個人の言語コードは今後さらに精密なものになっていくことが予想される。また、いわゆる都市化の進行に伴って、どの地域においても出自を異にする社会集団がさまざまに共存するといった状況が生じている。特に大都市は次第に言語の垣塙と化し、そこでの事態は今まで考えられなかったほどに錯綜したものになりつつある。外国語との接触における問題も眼前に直接的な形をとって現出してきている。各種の言語が接触、混在するとどんな現象が生起するのか。そして、その過程で在来の方言はどのように干渉していくのか。これらの問題は、すべて、地域社会の言語を研究対象とする者が、今後直面せざるを得ないであろう課題である、と結ぶ（第2節）。最後に「日本における社会言語学的研究文献抄録」が付されている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文にまとめられた研究は、伝統的な方言研究を基盤にしなが、それを大きく超えた、新しい社会言語学的視座からの画期的なものである。日本の社会言語学の堅実な発展の一段階とすることができよう。言語の変化をめぐっては、一般に、大別して二つの側面が指摘される。一つは、例えば音韻面での、いわゆる規則的音韻対応となって現れるような、言語自体に内在する要因による、いわば規則的な変化である。そして、もう一つは、外在する社会的（心理的）要因によって個別的に起きる変化、例えば、他の言語からの借用や、干渉によって生じる類推変化などである。ところで、これらの言語変化のパターンやメカニズムを解明するためには、その変化の進行途上を精密に観察することからはじめるべきである。換言すれば、共時態における言語変異を調べ、そのなかに通時的变化を進行中のものとして読み取ることと考えられる。本論文は、このような観点から、地域言語の変化を動的にとらえ、そのプロセスをそれぞれに詳しく追究したものである。

本論文での考察に用いられているデータは、その大部分が筆者自身のフィールドワークによって得られたものである。また、本論文における理論化や解釈は、その大部分が筆者自身の考えから出たものである。なかでも「リーグ戦式全数調査」は筆者の創案になるもので、発表当時から高く評価され、その後の多く

の研究者がこの方法論を活用している。筆者は、この方式のもとに、待遇表現行動をめぐって、「具体的な個々の話し手と話し相手」という場面から調査を始め、「家格・家族内地位」といった別の場面を抽出することに成功している。さらに、経年的な調査から、近年まで“秘境”とうたわれてきたフィールドの越中五箇山郷が、いわゆる都市化の流れのなかで急激な社会変化をとげたこと、そして、それとの関連で住民相互の言語行動に民主化の標準が定着してきたことを実証的に解明した。このような研究は当該地域社会の構成員が比較的少数であったから可能であったともいえようが、全数調査による徹底したきめの細かいものであるところに意義がある。小さなサンプルによる調査ではあるが、十分に普遍性を有するものと考えられる。

本研究は、筆者の22年の歳月をかけた綿密な調査によって裏づけられたものであり、そのスケールの大きさには追随を許さないものがある。本論文におけるそれぞれのジャンルでの成果は、いずれも日本の社会言語学的研究の水準を高めた点で貴重なものであるが、そうであればこそ、今後の研究課題としてさらに望みたい点も存在する。それは、まず、本論文での事例の多くが、いわば属性論的な立場からの要素的言語変種運用の研究に範囲が限られていることについてである。言うまでもなく、言語はまずコミュニケーションのなかでその機能を発揮する。しかし、言語の機能は伝達に限らない。談話など、より大きな言語単位に着目し、言語の機能を広くとらえ、人と人との間でのいわゆる対人行動を、総合的にとらえなおす姿勢が是非とも必要であろう。また、人間の一般的認知能力との関係で言語理解を考えることも将来の重要な観点となると思われるが、本論文ではそうした面に触れるところがなかった。しかし、もちろん、これらの点は望蜀というべきものであって、自ら研究を推進する力を持つ筆者の将来に期待すべく、けっして本論文の価値を損ねるものではない。

以上のように、本論文は、すぐれた学問的業績であり、今後に予想される研究の新しい展開に指針を与えるものとして、文学博士の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。